
UNKNOWN ~ 未知なる ~

紫陽花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UNKNOWN〜未知なる〜

【Nコード】

N1764A

【作者名】

紫陽花

【あらすじ】

昔から違う世界を思い描いていた少年は、その望みを叶える為に旅へと出た。これから、待ち受けるのは本当に望んだ世界なのか？

第一話・平和な世界

「俺……。違う世界に行きてえ……。」

（俺が願うことは、幸せが訪れること……。それしか、思い出せることがないからかもしれない。）一本だけ立っている木陰の樹皮に寄りかかり空を眺めている。空は快晴と晴れの境目だったがジンの心は晴れ渡ったと言いくらい心模様だった。

「ジン!! グリン……。」

「あれ……? 探していた?」

授業を抜け出してきた俺を探しにルージアが、借り出されたらしい。（ルージアは、俺を引き取ってくれた夫婦の一人娘。だから生まれたときからの兄弟みたいな……。）この世界は山と山に囲まれた極小さな町だ。

「ジン……。あんなね……。サボるからバカなのよ。」

「うるせえ。俺は、早く違う世界にいきてえんだよ……。」

（そうさ……。此処は平和すぎる。ここより、もつとひどい街があるんだ! だから、その人たちを救ってあげたい。ただの、自己満足って言う訳じゃないんだ……。『孤独』に、生きて来た……。俺だからこそ……。だから……!）

ドカッ

「いつてえ……。」

「何いつてんのよ! 此処は、唯一封印されている世界なのよ! 安全なの! 当たり前でしょ? だったら、なんで危険な場所に行こうとするの?」

「・・・うるさい・・・。あっちいけよ・・・。」

「もう、知らないんだから！」

あいつは、心配してくれてんだろうな・・・一応『家族』って、やつなんだから・・・。俺の、『母さん』『父さん』って、人たちは今どうしているんだろうか・・・？俺は、憎んでなんかいないのに・・・。どうして、迎えにこないんだ？寂しいのは・・・わかつていくにせよ・・・。（そう考えていたジンは数分考え込んでいた。やはり決意は一つなのだと言にはあらわになつていたが晴れ晴れとしなかった。頭の中には雨が降ってきそうな勢いだった。だが、その一本立っていた木下から動かなければまたルージアが来るので動かざる終えなくなった。この気には思い出があつたため無意識のうちにここへ来るのはジンの悪い癖だった。

「俺・・・いつか旅に出てやる・・・。」言葉に発しないとまた決意に乱れが出てしまうと思つたのかいつにもまして勢いが出ていた。

とりあえず、その場にいると教師がやってくるので羊小屋へと移った。

「おい。なにやってんだ？問題児が！」

「げっ・・・。」

（俺は、なんてバカなことしたんだ・・・イズリ爺ちゃん的小屋にはいちまつた！）

「いてえよ・・・。」

イズリに、耳を引っ張られて学校へと連れて行かれた。

「勉強しろ！」イズリはその大きな声とその腕力でアッ圧倒して強

いのだ。だから、ジンがかなうはずもなく、ただ引きずられ行くのみだった。

「あー……。つまんねーえ。」教室に戻って勉強をはじめて数秒のことだった。

バコッ何かが飛んできてジンの頭にぶつかった。それは、洗濯バサミだった。

「何すんだよ！クソ教師！」洗濯バサミを気にすることもなくジンは声を張り上げた。

「言葉を慎め！」ディークはジンに負けじと大きな声を張り上げた。（学校の教師フィリオ＝ディーク。ちなみに、十八歳、性別、男。独身。彼女なし。趣味、つまんねー授業をすること！（俺流）特技、物を投げる。）

「ジン＝グリーン、真面目になれ。」呆れたように言った。

「うつせー。」ジンも毎度のことに飽き飽きしていた。

バコッお次にハンガーが飛んできた。多分、ズボンとかを掛ける小さい形の方だと思われる。

「なにしゃがる！」やはり声をあげずにいらなかった。

「先生に向かって言うことか？」言葉を慎めと同様な口ぶりで言った。

「そんな歳もかわんねーじゃんか！」確かに歳はそんなに変わらなかった。離れていたとしても一歳か二歳程度だろう。ジンの年齢は一切不明なのだし……。

「先生！ジンはほつといて授業進めてください。」ルージアが綺麗な透き通った声で異論を述べている。「それもそうだね。」ディークはその異論に納得するようにジンを抜け物状態に放って置いた。「これは……。」「教室の中にはディークが授業を進める声が響き渡る。」

（クソ教師！うつせーやろうだ……。家族みんなこの平和な空間に住みやがって……。クソッ。ふざけんな！）ジンはディークを相当嫌っていた。それも、仕方ないと片付けてしまえば楽なことだ。

しかし、そもいかなひのが人の定であらう。

（フィリオ＝ディークは、俺が一番嫌いなやつだ。生まれたときから、幸せに暮らしてやがった。俺なんて、故郷はきつと此処じゃないだろうし、母親も、父親も・・・顔なんてもんもしらねー。だから・・・。むかつくんだ・・・。才能あふれた人材だとか言つてもてあそばれて、俺なんて才能もありやしない。）

「ジン！」

「ルージアか・・・。なんだよ、説教ならイズリ爺にされたからいらん。」

「ちがうわよ。あんまり、ディーク先生をいじめないで。」

「は？俺、いじめてなんかねーよ。」

「・・・、先生は・・・」ルージアが言いかけたときディークは優しく笑つて首を横に振りながら穏やかに言つた。

「コラコラ、もう下校の時間だよ。」

「先生・・・」ルージアは心配そうにジンを見つめていた。

「ルージア・・・大丈夫だから・・・。」

第二話・同じ者

「ジン、残りなさい。」デイクの顔は意も言わせぬ顔だった。

「なんだと？」ジンはその見幕さに不信を抱いた。

「サボった罰だ、先生の話を聞きなさい。」

「ちえっ……。」舌打ちをしながらジンはデイクを睨んだ。その顔は怖がっているということなど微塵も感じない勇ましい姿だった。けして、戦いに行くということではないが何故か闘争心があたる空間の権利を握っていた。それに気付くのはルージャイだけだった。ジンはデイクの後をついていく間も、頭、首、背中、その三ヶ所を順序良く上から下へ嘗め回すかのように見て、背中まで言った後反対から下から上を嘗め回すかのように見た。そして、ふと気付くとデイクは立ち止まりドアを開けた。そこは会議室だった。説教する場所がなかったのか殺風景な場所だった。この部屋は、どんなに声を張り上げたとしても誰の耳にも入らないし視界にも入らない奥の部屋だ。たぶん、その理由で会議室だったのかも知れない（説教か……？たく、めんどろなこった……。）

会議室に通されたジンは一通り会議室を眺めた。

「ジン……。」深刻そうな面持ちで微かな声で言葉を発した。

「なんだ？」ジンは軽々気付かなかったように弾む声で言葉を放った。

「君の……君の両親の事なんだが……」

*

「クソ教師のバカヤロー。」

ジンは、丘の上で叫んでいた（叫ばなくちゃストレス解消にならないからな……。）

『君の両親は、事実上亡くなっていると記されてある。』

『は……、なんだよ……いきなり……。』

『真実は、確かめなくてはわからないだろう。』

『なんで、デイクが知ってんだよ?!』

『ふざけやがって……』

『ジン!』

『うぜーんだよ!クソ教師!』

「はぁ……。」「いろいろ知ってしまったこと輪吐き出すように溜息をついていた。正直な所

ジンは、迷っていた。(『いつか違う世界に旅にでる。』とか、言
って……。なんなんだよ!俺はこんなに根性のないやつか?)ジ
ンは、また木陰にいた。座る様子もなくただ立っていた。

「ちくしょう!」木を握りこぶしで何度も叩いた。どう見ても怒
りがあらわになっていた。

「なにがよ?」ルージャはそつと後ろから声を掛けた。優しい声
だった。がジンの顔は闇に沈んでいた。「あ……。ルージャ。」ジ
ンは顔を隠し目をそらす。ルージャはそんなジンを見て心の記憶
に沈んでいた。

「知ってたんだ……。ジンの両親のこと……。」「と、重い口を開
けた。表情は暗く声は微かに震えている。「ふーん。」陽気な声を
取り戻そうとジンは軽く流す言葉で答えた。

「何よ!その言い方。」そのいいかげんな態度に怒りが込み上げて
きた。

「俺より先に知ってたんだろうが……。あのクソ教師と同じだな……。
。」捨て台詞のように吐いた。「先生は!……。なんでもない……。
。」口ごもり言おうとしなかった。

「いいんだよ、親が死んでいただろうと、旅にでることに変わり
はねー。」ジンはまだ捨て台詞のように吐いた。(うそだ……。今は、
まだ迷っているに……。)ジンは、自分の言葉に嫌気がさしてい
た。「じゃあ……。!」いきなり明るい声が飛び交った。

「ん?」ジンは思わず拍子抜けしたように問い返した。

「私も……。私も旅するよ。ジンと一緒に……。」「目を上目遣い

にして返答を待っていた。

「やだね。」さっぱりした口調で答えた。正直そういわれて嬉しいはずだ。しかし、陣はちゃんと考えていた。

（だけど、巻き込んでしまっているのいいのだろうか？違う世界には、魔物が出ると聞いている・・・俺、守れんのかな？こいつを・・・）

「監視役として行かせてもらおうよ！」後ろに手を組み陽気な声で言い返す。

「やだ。お前となんて旅できるかよ。」本当の気持ちを隠し反対をした。

「もう知らないんだから！バカ。」とうとう、怒り出した。ルージアはとても気性が荒かった。そして、その愛くるしい頬を背を向けて膨らませていた。

「お前には、本当の両親がいるだろう？」ジンは少し落ち着きを戻しちゃんとした意見を述べた。

「へ？」ルージアはこういうときこそ怒って声を張り上げると思っていたに違いない。しかし、

「だから、大切にしろよ・・・」ジンは優しく微笑んだ。

「ジン・・・」ルージアはジンが遠い存在に見えたらしい。後を追いかけるように一歩進み出た。「ちよっと、散歩してくる。」

ジンは木の陰から離れ道を歩いた。ルージアはジンの背中めがけ「ジン！」と叫んだ・・・。

*

（クソッ・・・嫉妬か？両親のいるやつに嫉妬している自分が弱弱しくて嫌いだ。やつぱり、旅にでるぞ。俺の親だって死んだって決まった訳じゃないんだ。でも、自分のために旅に出る。親なんて関係ね・・・。）

もう、誰にも止められねー。）

それにしても、どうでんのかな？この町は封印されてんだよな。此処から出たやつはまだいないって聞くし・・・。

「ジンか・・・どうしたあ？」

突然男の声がした。その声をしたほうを向くと太陽が眩しく黒い影だった。しかし、何秒かたってから太陽が雲にかかり、その人物の顔がやっと見る事が出来た。が、クソ教師ディーク。

「ディーク・・・もう俺に構わないでくれ。」

本当に俺は構わないで欲しくなかった。それは、こいつが嫌いなだけでなく嫉妬心でもなくて。

今は、ルージアのことが気に掛かっていた。それに、良い考えが浮かんでこなくて苛立っていてつい八つ当たりをしてしまいそうだったからだ。

「ジン、君は本当に旅に出るんだね？」

「ああ。わりいーかーあ？」

と、その場を後にしようと立ち上がった瞬間。

「僕・・・知ってるんだ・・・。」

「ああん？なんだよっ！はつきりいえよ！」

ジンの、怒りのボルテージは100%をゆづに越えていた。

「この、封印された町から出る方法を・・・。」

第三話・親と子

「五匹の靈魂？」

「そうなんだ、昔のこの町の神話なんだが・・・」

この町から出られる方法とは五匹の靈魂という聖獣の力で封印の一部を解き放つというものだった。この町には古くからある話だそう
だ。

*

この世がまだ生まれて間もない頃、此処には神が存在した。その神は、この土地に人間という物の命を育んでいこうと考え、此処には魔物が入れなくするために封印を掛けたそうだ。そこで、天に司る四神と神で五ヶ所の最も天に近いところで封印の儀式を一斉に行ったそうだ。最初は失敗だったそうだ。しかし、その四神と神の命でその封印は完成した。そして、今でも残っている軌跡がザガト山・グイル山・惣山・啞熊山・奉加遺跡のすべてのどこかに残っている。そこには、神と四神の靈魂が聖獣の魂と重なり何処かで生きているそうだ。

*

「なあ・・・ディークは何でそんなこと知ってたんだよ？」

率直な質問をした。（何で俺なんか教えるんだ？それに、俺が旅に出ても構わないんだろうなか？）しかし、ジンはたくさん聞きた
いことがあった。それはその率直な質問だけで足りるだろうと思っ
た。あえて、言わない方が口論につながらないからと思ったからと
いうのもあるだろう。

「僕も、この町から出たかったんだ。」

ジンは、何も返事はしなかった。ただ、デイクを見ていた。その後ろ姿は暗くなどなく良い思い出を思い出すかのように輝いていた。デイクは俺の方に振り向き

「君と似てたんだよ？だから、ね？」

（なんとなく、なんとなくだけどわかってた。コイツと俺が似てることは。そんな不思議でも驚くこともなかった。）

「だから、か・・・？」

「そう・・・だから昔調べたことを君に教えたんだ。僕が果たせなかったことは君だったら出来るような気がするんだ。」

そのあとデイクは、似てるって言っても僕が持っていない物を君はたくさん持っているからと、付け足した。

「じゃっそれだけ教えときたかったんだ。たぶん君は知ることには出来なかったと思うし。」

「なんだよ！それ！」

「・・・これは・・・この町の禁句なんだよ。」

デイクは俺の前を通り過ぎて

「頑張るんだよ。挫けず・・・。」

その一言を残して、俺のいた場所から立ち去った。『挫けず』とは、何のことなんだろうと考えていた。

*

「俺・・・旅に出る。・・・此処ん家の息子でもないのに・・・ここまで育てていただきありがとうございました。」

「ジンっ！」

ジンは、帰宅した早々旅に出るということをしてルージアの両親に話した。殴られたって行くつもりだった。俺の決意は固かったから。

「行くんだなあ・・・ジンもそんな年頃にまで育ったってことか・・・。」

ルージアの父親、ホリス「ファントルがいった言葉は自分の胸に

刺さった。本当の息子のように十一年間育ててくれた。

「ジン、この町から出たら戻れなくなるかもしれないんだよ？それでも行くのかい？」

優しく話し掛けてくれたのはサリナ＝ファントル。ルージアの母親。

「ああ……。気持ちはかわないんだあ……。ごめん……。」

「ジンっ！」

ルージアがジンの目の前に駆け寄った。そして、その目には溢れるばかりの綺麗な透明の雫があった。鼻を嚙っていた。

「わた……。わたしも……。つれていきなさい。」

泣きながら自分の方が有利な態度にしようと語尾が命令をしていた。しかし、其れに怒ることは出来なかった。こんなに泣いていてくれる人は何処にもいないだろうと思っていたし心配してくれているのだと再度理解したからだ。

「ごめん……。つれていけない。」

大きい赤い目をこちらに向けて鼻の下を擦っていた。微かに言葉が漏れてきたのがわかった。しかし、なんと言っているのかわからなく、えっ？と聞き返した。

「バカッ。」

「泣くな……。」

「うつ……。。」

ルージアは走って家を出て行ってしまった。幸いまだそんなに日は落ちていなかった。ところで、と、ホリスが続ける。

「ジン、いつ頃出るんだ？」

まだ決めてなかったことに気付いた。しかし、『わからない』などと答えてよいものか迷った。せつかくここまで話が進んだのに、自分的にも無責任だと思った。

「……。明日には……。」

とっさに思いついたのがなぜか明日だった。そんなに早く行く気もなかったはずなんだが。

「明日・・・早いね・・・。旅支度はしたの？」

サリナは快く承諾をしているみたいだった。しかし、ホリスは相変わらず新聞を読んでもいないのに顔の前に広げていた。相当反対らしい。前にもこんなことがあった。其れを思い出すのにさほど時間は立たなかった。

第四話・旅

「俺・・・ここん家の子供じゃないんだろ！」

町には押さない少年の声が響き渡っていた。その声は、真実を初めて知ったシヨックと孤独感で震えていた。それは・・・昔のジン。この頃は、まだ六歳くらいだった・・・本当のお父さん、お母さんだと思っていた。しかし、周りの目が俺に気付かせてくれた。何故か、ジンへの視線が違っていった。

ホリスは・・・この後、思いっきり殴ってくれた。

「静かにしろ！確かに、お前は俺の实の息子じゃあないし血なんてもんもつながってねえ。だがな、もう一緒に家族としてやってきたんだ！だから、もうそんなことなんて関係ねえ・・・。お前は俺の息子だ・・・。」

本当にホリスは父親だ。文句のいいようもないいい父親だ。だから、あの時叩いてくれた。感謝してる・・・。

*

「親父・・・聞いてくれ・・・親父は俺の親父だ・・・。」

*

ジンは、幼い頃からこの旅を望んでいた。まさかこんな早く実現するなんて思っていなかった。昔の事を思い出しながら自分の部屋に入って旅支度をはじめた。必要なものや大切なものはそんなに多くない俺だったが、親父が渡してくれた旅の道具、それに母さんが渡してくれた食料は俺の荷物を何倍にも膨らませてくれた。

「こんなにいらないんだけど・・・。」

「持つて行きなさい。これは、どんな重くても・・・。」

つと、渡してくれたものはお金と写真だった。

「これ……。」

「こんだけあつたら足りるともんだけど……？ねえ？」

「……お前の一生分のお小遣いだ。」

ジンは、泣き出しそうだった。相変わらず新聞は開きっぱなしで顔なんて見られなかった。しかし、親父の声は優しかった。辛そうだった。ホリスも泣き出しそうだった。サリナも……。ジンも……。

「金……要らないよ……。」

ジンは、この家からお金をもらうことは出来ない。消して裕福ではないのに、こんな大金をもらうことは罰当たりだった。

「……。お前が決める……。」

「親父……。」

「持つて行きなさい。心配なんて要らないんだよ？」

ジンは頷いて、半分置いていった。

何故、半分置いていったかという好意は頂いたし。それに、生きていくのには大切なお金だ。全部置いていくのは命を捨てるのと同じだ。しかし、全額もつていくとなるとこの家族が苦勞をする。だから、全額マイナス好意分で半分。図々しいだろうと思うが現実お金がなく生きていくのは不可能に近かった。それに、未知の体験になるだろうから何が起るのか予想もつかなかった。仕方ないんだ。「ジン……ルージャアを連れてつてくれないかね？」

ジンは、この言葉にビククリした。まさか、自分の娘を連れてけとは言うとは思わなかったからだ。

「母さん……何言ってるんだよ……。」

「相談したのよ、お父さんと。ルージャアはついて行きたいといっているしあの子の気持ちを尊重してやろうと思っているの。迷惑だったら無理しなくていいわ、だけど……あの子の荷物がもうないのよ……。」

第五話・女の子

「はあ……。走ったら疲れた……。」

（ジンのやつ！この私を置いてくなんてできっこないわよ！だって、私も決意が固まっているんだから！未知の世界だろうが魔物が出ようがジンがいれば別よ！後悔なんてしやしない！）

出発当日が来た。ジンは荷物を手に持ち家の外壁を眺めていた。懐かしい思い出がこみ上げてくるがそれもただの重荷に過ぎなかった。しかし、そう簡単にすてられないのがひしひしと心の中で苦痛となつて感じられた。もう、迷わないと決めたのに……。

「じゃあ……。」と、言つたものの一步目が進み出られなくなつていた。ホリスはそんな息子に「行け……。」と、一言いつたのだ。ジンは、少し微笑んだ。そのホリスの行動はいつもと変わらないホリスの優しさだったから……。

「行つて来る！」

一步踏み出したら、二歩……三歩……。と、自然に出た。あまりの自然さに驚きもしたが後は振り返らず焦らず……涙をこらえて……進んだ。ある意味での前進だった。

しばらく道なりに歩いているとそこへ、木立に立つた人影がこちらを見ていた。それは、間違えなくルーギアだった。ルーギアが道に出てきたら何か仕草をしていたのが見えた。あまりにも読み取りにくいものだったがジンには何となくわかつていた。（きつと、あれのことか……。）ジンは駆け足でルーギアのところへ行つた。ルーギアの顔は膨れっ面だった。其れを見るなりジンは噴出しそうになったが笑っている場合ではないことがわかった。ルーギアは真剣な顔つきで「連れていきなさい！もう、荷物があるんです

から！このままじゃ家になんて帰れないわっ！」強気に出るのはいい癖とはいえないのだが、いつも通りのことにジンは（少しは学習しろよ）と、言う気持ちになっていた。ルージアは返事を待っているみたいだったが、もう後に引けないという決意が目に見えていた。ジンは渋々「ついてこい。」と、言う一言だけだった。その、偉そうな態度に腹立たしい様子を見せていたルージアだが文句もいえずに言葉どおりついていった。いつもは会話が弾む2人でも、今回ばかりはそうは行かなかった。後戻りも出来ないたびの始まりなのだから。ジンはデイクの言葉を思い出していた。まずは、封印のことだ。五ヶ所の場所を記した地図は持つていないが、そのことに心配はなかった。今通っている道のところでもデカイ大きな山が五つ見える。そして、山の名前はわからないがこの先十キロで山な移動に時間が掛からなかった。「ジン……。」ルージアがいきなり話し掛けてきた。ジンが振り向いてみると物凄く距離が離れていた。「どうした？」大金声で叫んで駆け寄った。ルージアはへたれこんでいた。空腹か疲れたかのどちらかと見当はついた。（だから、女連れてくのは……）と、ジンが思いにふけていると。「歩くの速いのよ……！」と、それだけだった。「もう、そろそろ日が沈む頃だ。」と、ジンがさり気なく言ってみると「じゃ！休みましょう！暗いのは危険だわ！」と、嬉しそうに言った。ジンは少々溜息混じりに「はいよ……。」といった。それがルージアには不満だったらしい。顔が少し膨れていた。

夕食の支度はルージアに任せようと思っていたが、ジンはルージアが料理することができないことも知らずに任せていた。しかし、いきなりルージアが叫びだした。「もーこんなの無理！」怒鳴り散らして近くにあった川沿いへ走って行ってしまった。（仕方ねーか……）。生きていくためだ。俺が作ってやる！）ジンは闘気を燃やして旅の一般メニューカレーを作った。初めての料理だったが毎日サリナのおいしい料理で舌が肥えていたので味見をしながら調

節していったら、なんとサリナに負けなくらいの味になった。ジンは満足げに鼻を噉っていた。そのカレーを家から持ってきた皿に移して盛り付けをした。立派な夕飯が出来た。そのとき、とぼとぼとルージアが歩いてきた。カレーの匂いにつられてきたのだろう。ルージアは笑いながら「お腹すいちゃった・・・。」っと、いつて照れていた。ルージアは作れないことに申し訳なさそうだったが、其れを悟ったジンは「気にしないでいいから・・・。」とお前は食べるほうに専念してればいいから・・・。」と、男らしい？台詞を言ってみた。ルージアはコクリと頷いてカレーにがついていた。次第に辺り暗くなり、あたりは銀世界へと移り変わっていった。こちら辺には家がないためほとんど光の邪魔が入らず月の光と星の光だけの世界だった。（これが本当の世界なんだな・・・。）方ひざを曲げて座っているジンの横にルージアが腰を下ろした。ルージアも夜空の銀世界に見入っている。ルージアはジンから見て幼さが残っていたが夜空の光に照らされた顔には大人びた一面があった。ジンは数秒の間ルージアに見とれていた。綺麗、美しいと、言う言葉はうかんでこなかったものの何か心の中で暖かいものに触れた感じがした。ルージアがジンのほうに振り向くとジンは顔そらし少しの沈黙をやり過ごした。そして、長い時間2人は夜空を堪能した。

第六話・教師として

ルージニアが寝てしまった後、ジンは灯がともった焚き火の火を見つめていた。辺りは、やはり暗く、静かだった。昔の思いにふけていたジンは片手にコーヒーを入れたカップを持っていた。しかし、その沈黙は草の音でかき消された。（誰かが・・・来る・・・。）

ジンは火を自分の足で踏み消した。武器は短剣が五本だけだった。これはジンが拾われる前から身に付けていたものらしい。その短剣を足にぐるぐる巻かれた両足の包帯に二本ずつ。そして、手に一本所持していた。長い沈黙の重い空気があたりの空間を取り巻いていた。そして、また一步と近づいてくる。草はカサカサと鳴り、相手はその音やこちらを警戒していないように感じられた。だが、油断は命取りになりかねない。ルージニアの命の守らなければならない。そのことが、少し重荷に感じられた。（後、一步・・・いや、三步踏み出したら即駆け出して刺す。）ジンはそう考えたのは集団ではないので山賊ではないと思えるし、腕っ節がいい大男でも俊敏に動けるジンならば射程距離以内だからだ。しかし、影から見て大男ではないようだった。しかし、油断はしなかった。（あと、二歩）

一刻と射程距離以内に踏み込んでこようとしている人物が手をふってきたのである。それには、ジンも驚いたが（油断させようとしているのかもしれない）と、慎重に相手の動きを伺った。思わず声が出てしまった。「誰だ！」その声は響き渡っただけで返事が返ってくる感じはなかった。そして、相手が最後の一步を踏み出たときに顔があらわになった。それは、デイクだった。ジンは拍子抜けしたようななんともいえない表情だった。デイクは満面の笑みで微笑みかけていた。

「やあ。追ってきてよかったよ。」穏やかな声音で言うデイクは、本当に心の底から言っているようだった。ジンは落ち着きを戻し「で・・・何用？」と、そっぽを向いて聞いた。そのようなことに

する様子もなくデイクは表情を硬く締め本題を切り出そうとしていた。

「ジン。これ、地図なんだが……。忘れていったる？」デイクの手のひらに乗っている物はまさしく地図だったが、ジンは渡されたことなんかあっただろうかと考え込んだ。しかし、見に覚えはなかった。（こんな地図なんてしらねえ……。）ジンはそのことをデイクに告げようとしたが「ごめん……。渡し忘れただけだったね。」開き直ったかのように笑ってごまかした。そして、仕切りなおして本当の本題はというと「実は……。」「デイクは真剣そのものだった。あたりは静寂に包まれていて二人だけの世界へと変わりつつあった。一風吹いた後、デイクの重い口が開いた。そして、発せられた言葉とは……」

「僕も……。連れて行って欲しいんだ！」おちゃらけた空気が周りを漂っていた。そして、ジンはつつこむ気も失せたらしくその言葉を聞いた直後に立ち上がり木陰の方の寢床へ向かおうとしていた。「ジン……。真面目な話なんだ。」継るような声でデイクは言った。そして、デイクはジンを回想シーンへと引きずり込んだ。

第七話・同類として

五年前、デイク少年はこの世界を出ることを決意した。まず、それには待望の知識が必要不可欠となった。そして、この世界を出る方法を手探りに調べていった。しかし、それはとてもつらいことだった。現実にはこの世界を抜け出したものではなく。ここの世界を出ようという者は誰もいなかったからだ。未経験、未知の経験。デイク少年は戸惑いだしたのだ。かならず出ることはい出来る。出来るはずなのだ。しかし、神話などを調べるに連れて思いもよらない答えに行き着いてしまったのだ。それというのは、ある青年の話だ。この世界が、まだ封印されていなかった時の話である。その青年は、突然行方がわからなくなってしまうていたこと。その青年の家には、妙な文面、地図、などが発見されたそうだ。しかし、未だに行方は知れず、消えた記憶として本に載っていた。デイク少年は、その青年、ガブルの持ち物を集め出した。それには、世界の構造が記されていた。このような情報はいくら探しても出なかったもので、大いに役立つと考えたのだ。しかし、重要な封印外へ出ることには書かれていなかったのだ。そして、そのことに気付いたのは一年前のことだった。そして、諦めざる終えなくなった時、ジンの世界を出るという決意を知ったのだ。そして、ジンのことが頭に引っかけり周辺を調べ上げたのだ。ジン・グリーンはこの世界の外から来たことが判明したのだ。そして、ジンの両親のことは何も記されていなかった。デイクにとってとても気になる人物だった。そして、つい昨日のこと・・・ルージアの両親から頼まれたのだった。「娘と息子のことなのだが・・・デイク、あんたは昔この世界について調べていたんだろ？お願いだ・・・2人の力になって欲しい。」と頼まれて、今の状況に至る。

*

「わかったか？」と、理解を求めるようにデイクはジンのほうへ

振り向いた。ジンは、一度消した火をつけた。そして、明るくなつた視界でディークを見た。「言いたいことはわかった。」偉そうな口調で言うのは、本当に信用はしていないからだ。ディークは自分達をだまそうとしている。ジンの勘はそう判断した。ディークは火を見つめて言った。「信用ならないのはわかつている。地図だつて渡すつもりなんてなかった。」と、意見を述べて付け加えた。「しかし、昔のことだ。」遠い空を見渡して溜息混じりにそういった。ジンはその表情を眺めていた。空気は、また入れ替わつて新鮮なものだった。そんなに時間は動いていないように見えたが、もう東の空がうつすら白かった。そして、朝日が昇ることを知った。「ディーク！とにかく、少し寝させてくれ。・・・お前も寝ろ・・・。」ジンは照れくさそうに言った。ディークはコクリと頷いてジンの後に続いた。そして、つかの間の就寝時間が過ぎた。

朝は、さすがしかなかった。太陽は、もう高い位置まで上つており昼間くらいだろうと予測できた。ジンが起きる前にルージャは起きていた。そして、「おはよう。よく眠れたわ。」と笑顔を振り撒いていた。そして、その後怒った様に言った。「ジン！なんで、先生が来た時起こしてくれなかったの？もぉ・・・。」ルージャは2人だけのやり取りを心配していた。よく、口論をする上殴り合いなどもしばしばあった。敬遠の中という言葉が相応しかった。そうこうしているうちに、さわやかな薄ら笑顔を浮かべてディークが茂みからやってきた。「やあ。おはよう。朝食はどうするんだい？」と、といった。当然ジンが作ることになった。ジンは一晩で腕をあげた。朝食はパンにサラダ。しんみりした庶民の朝食だ。昨晚の力レーは、一晩置いて熟成さあせてから食べることにした。ディークは三人分のコーヒーをいれている。ルージャはいるとドジばかりするので遠く離れた川原で水を水筒の中に入れいた。この頃の世界の水筒は木のふと枝の中をのぞいた筒状のものに丸くくりぬいた気の底をはめ込んだものだった。ルージャは、少し溜息をついて考え込んでいた。（私・・・邪魔なのかな？ドジばかりだし。・・・でも、

ジンとは離れたくない。．．これは、ある一種の決意なのだし．．．
。そうよ！大丈夫。＼ルージアは、水がくみ終わったのでジンの
ところへ戻ることにした。ルージアもジンと同じ考える事が苦手
だった。そして、ルージアがジンたちのもとへ戻ると、そこには
“朝の朝食の代表”のようなものがずらりと並んでいた。その料理
というのは、フライパンで焼かれたサクサクっぽい焦げ目のついた
食パン。新鮮に水の雫がついているレタス・キュウリ・トマト．．
などなど。そして、湯気が立ちのぼるブラックコーヒー．．。ル
ージアの目は星が三つ漂っていた。（お、おいしそう。ジン、ま
た腕上げたみたいだわ．．。＼ルージアの表情に一瞬くもりが
見えた。（ジンは何でもできる子だわ。ただ、やらないだけで．．
。私なんてやっても、やってみても．．うまいかないんだもの．
．。嫉妬なのかしら？）ジンはルージアが戻ってきたのを目で確
認して「ルージア、準備できたから食べようぜ。」と、元気良く
声を響かせた。ルージアは、さっきの考えは何処吹く風といった
ように晴れ晴れした笑顔を見せ頷いた。

第八話・再出発

「じゃ……。もう、そろそろ行くとするかな……。」「ジンが、そういうと立ち上がって伸びをした。重い荷物が少し軽くなったみたいだった。たぶん、食料を予定外の三人分使ったからだろう。ジンは、ディークを見た。「ここから、何キロか歩けばザガト山のふもとの町につくだろう。」「ディークは地図を見てそういった。そして、三人は道なりに出た。その道は永遠と続くようだった。まったく、先が見えなかった。その、道の周りは大樹が何本も連なっており、森、とまではいかないが、森林地帯であることは間違いないかった。さっきの所に比べると日の量が少なく薄暗い感じだった。しかし、小鳥が羽ばたき新鮮な空気が流れていた。ここには、もっと大きい獣がいるようだった。

「なんか……。不気味だけど暖かいね……。」「ルージャは和やかにいった。単なるピクニックと勘違いしているようにも取れた。まだ、ここは魔物らしきものは、現れない封印の中であるから、安全なのだが、そう油断もしていられない。ここの薄暗い場所にはもしかしたら獣がいるかもしれないのだから……。そうこうしているうちに、森林地帯を抜け、今度はひがさんと降り注ぐ平地があった。そこには、短い芝生のようなものしかなく高い木がほとんどなかった。眺めが良すぎるような感じだった。「……。あと、どれくらいなんだ?」ジンは、溜息混じりにそういった。けして飽きたわけではないのだが……。まだ、先が見えずにいた。ディークは少し唸り気味にいった。「そういわれてもな……。」「ディークは地図を見た。ルージャはその地図を見せてもらおうと、側に寄った。「先生……。こんなんでわかるの?本当に?」ビクリした表情でディークを見つめていた。「なんだ?どうしたんだよ?」ジンも興味心身になりながら、ディークのもとへと足を運んだ。そして、「なんだ?これ……。?」ジンは疑り深い表情でディークを見た。「あ

ははは。方向はだいたいわかるだろう？」笑ってごまかすディークに冷たい視線が向いていた。「……。」当分の間、三人の中は冷気が流れていた。ただ、無言のまま歩いた。

そして、いきなりディークが声をあげた。「おい、見えてきたぞ。先生に間違えはなかったぞ！」と、偉そうに言った。

「……。」ジンとルージアは無言のままディークを見つめた。

第九話・ザガト山 ふもと町

「わあ……。すごい人。すごい町……。」「ルーシヤは、目を輝かせた。ジンは、まわりをきよるきよる見渡してそれなりに驚いていた。デークは自慢げに胸を張っていた。

「ほら、先生のおかげだ！」まだ、言っていた。さつきから、この言葉を誰も聞いていないのに言いつばなしかった。

「おい。もう、わかったから。言うのはやめてくれ。」「ジンは、参ったように溜息混じりにいった。ルーシヤはそんなことお構い無に一人ではしゃいでいた。

「ねえ、ちよつと。お店見てきていいかな？」その目は、これ以上輝かないほど輝いており、誰にも止められなかった。

「……。ああ……。」「ジンは、少々驚きながら了解した。そして、その一瞬の内に町の彼方へ消えていった。（はあ……。俺だけか？普通って……。）ジンは正直参っていた。いっぺんを返せば超エリート为学校教師。と、かわいらしい知的っぽい少女。なのだが、本当の姿を見ると、自分に自信がないが、その当たっていたときの喜びようは以上だった。そして、少女の方は料理が下手で好奇心旺盛のちよつと（？）風変わりな子なのだ。ジンも自分でいつているより普通ではない。今は、けんか腰ではないがいつもは突っ張って意地っ張りで決意を決めたら何も考えずに行動が先に出る。ルーシヤより料理が美味い上、何でもこなせてしまう。カンペキに見えてカンペキではないのだ。そう、ジンが考えていると・・・

「おい、ジン。山の方へ行つて見るか。」「デークは正常に戻り真面目な顔をしていった。」「ん……。ああ。」「

二人はルーシヤを探すついでに山の付近へ行つて見る事にした。その町からは山は近く、山と一体になっていた。その山へ行く道のりは、ただの一直線で市場を抜ける山の側面が見えてくる。ルーシヤは、まだ見つからないが、とりあえず行つて見る事にした。

まだ、日が高い位置にあつたので、あまり心配はしていなかった。そして、山の入り口付近の入り口まで徒歩で三十分、黙々と歩いていた。この町は、日が落ちるのが早く太陽は赤く染まって今にも沈みそうだった。ジンの表情は少し心配そうにゆがんでいた。今からもどるにしても、三十分は最低掛かるし、それから探すとなるともう真つ暗の暗闇に空は支配されている。「困った。」（俺は、ルージィアを守ると誓ったはずだ。何故、独りにしたんだ。けして安全でないことはわかっていたはずだ。）心で、とても悔やんでいた。しかし、こうしている間にも日は沈んでく。ジンは、後に戻る方に足を踏み出していた。「ジン・・・心配か？ そうだな。戻ろう。」デイクは、明るくそういった。やはり、大人である。冷静にことを運ぼうとジンをなだめているようにも見える。ジンは、短く頷き、早々に足を速めた。

「あー・・・なんかこういうところって初めて・・・。」ルージィアは、独り言を呟き、周りを見渡して、あたりの目ぼしい場所を探していた。その町は、出店が多くあり、祭りのようだった。ルージィアがいた町は、『名がない町』と、言つて。ここでは珍しくも何ともない町だったため、この町『ザガト山 ふもと町』と、言う名前があつたので珍しく新しく感じた。ルージィアはお金がないため、見ているだけだったが、氣前のいい叔父さんが飴などをくれた。

「私って、独りだと何か色々あるのよね・・・？ この町は治安がよさそうだから何とかなりそうだけど・・・。私の故郷の町は、治安が優れていなかったからな・・・。」本当にそうだった。『名もない町』は、大勢の客人がこないため、物価の流通が一定で景氣が良い方ではなかった。そういうこともあつて、賊が結成されるなど日中茶飯事だった。ジンや、デイクがいた頃は何とか押さえていたけれど、今はどうなっているか分からなかった。二人は、世界の平和、新発見を、求めていたため、町を去ったが、良く思う人はあまり多くはないだろう。町が、平和なことが『名もない町』の最大

の目的だったのだから。

そうこうしているうちに、ルージニアは、一本道の外れまできていた。その目の前には、ザガト山が聳え立っていた。ジンや、ディークの姿はなかった。きつと、ルージニアを探しに言った後だろう。何処かですれ違いになったに違いない。（あれ？山？あ！ザガト山かあー。こんなところにあつたのね！）ルージニアは、ボーっと立ちすくして山を見ていた。

ガサツ―草を踏みつけたような音がした。（なんだろう？）ルージニアは警戒する様子もなく、その音の方へ近づいていく。其の音は、あまり不自然さをもちだしていなかった。

「誰？そこにいるのは？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1764a/>

UNKNOWN ~ 未知なる ~

2010年10月10日01時13分発行